

(後編)

お話 : 橋本武美

聞き手: 3 がつ 11 にちをわすれないためにセンター (わすれン!) スタッフ

ス 時間が経って、こうやって障害児の親にお話を聞かれる活動を始めた理由を教えてください。

橋 1 回目に録音をした時にも後半のほうにお話ししたんですけど。震災のことを思い出すと、あの時はすごく大変だった。障害を持ってる家庭ならではの大変さがとてもたくさんあって。だけど今、ちょっと整理できるぐらい時間が経って考えると、ああもっと自分にできることが、備えておけることがあったな、普段の生活の中でやってあげれば良かったな—ってということがいろいろあったので。近しい友達とかでも、うちよりももっともっと大変なおうちがたくさんあったんだけど、友達としていろいろ話はするけど、実はこういうことが大変だったとか、実はこういう助けがあったんだよとか、聞いてないこととかもあるかもしれないし。東北でこういうことがあったけど、みんなもう結構忘れかかってきて、備蓄とかもうそんなに気にしなくなってきたりしてるけど、やっぱりちゃんとやっというたほうがいいんじゃないかな—って。自分もう忘れてて、5 年保存水とかも全然切れてるし (笑) あーちゃんとやり直さなきゃな—って。時間が経ったから、ちょっと整理し直して話を聞いたりとか、自分も一緒に思い出して整理されて、ほかの方のことを聞いて学べることもあるかもしれない。

自閉症とか発達障害のおうちって、なかなかそれを発信しにくいんですよ、どうしても。遠慮もあるし、知られたくない—ということもあるし、分かってもらえない—ということがもう結構大前提にあるので、あまりみんな外に出さない、困り事とかも。だけど神戸のこともあったし、そのあと大きな水害とか、自分の家に住んでいられなくなっちゃ—うような障害者のご家庭が普通にあるんだから、そういう話を少し溜めていけば、些細な生活の中のことで、他の人が聞いたらすごく大事なこととか、ポイントなんじゃないの—って—ということがあ—るかもしれない。まず、私が一人ずつお話を聞いて少し整理して、それをわすれン!さんのほうでデータとして「じゃあこういうところをもうちょっと聞いたほうがいいんじゃないか」とか、「こういうところがまとまれば先々何かに活かせるんじゃないか」—って—ということがあ—るかもしれないな—って—いのを、ポツリポツリと自覚し始めたところで友人と出会う、「私が協力するよ」—って、「わすれン!の録音小屋に一緒に入ろう」—ってポンって背中を押してもらって。すごく自然で、「じゃあこの日に行こうね」—ってすぐ録音できたので。そこでまた手伝っていただける方とも出会えたので、そういうタイミングだったんだろうな—って感じます。

ス 震災直後とか、5 年後とかのタイミングでは、まだ振り返ってどうだ—とか—って—いう感覚ではなかったんですか?

橋 うちの息子は震災当時 10 歳だったんだけど、そのあと中学部に上がるとか、思春期に入るとか、日常でどんどんどんどん困り事が出てくるんですね。クリアになることもあるんだけど、いろいろ出てきて、安定して落ち着いていられるわ—って—いう時期がなかったんですよ (笑) ちょうどそんな時期だったので、振り返って整理するタイミングはなかった。軽度の知的障害の人達は、例えばイオンとかそういう大きい会社が特例子会社とかを作って、一カ所で 20 人ぐらい働いたりしてる人達もいるんだけど、知的に重度の人とか自閉症の重い人とかは、働く場所も少ない。進路がとても限られているところを、言葉は悪いけど、みんなで奪い合—って—じゃないけど—……卒が 2 つしかないところに希望者が 5 人いたら、うちの子が入れるかどうかとかを、高等部になるとものすごくせめぎ合うような。その辺もおかしいことなんだけれども、実際、特に宮城・仙台とかはそういう状況になっているので、ほんとにみんな、20 歳ぐらいまではなかなか落ち着けるような状況ではないんですね。なので、私の仲の良い人達とかも、みんなが大人になって、今だから振り返るよ—って—いう時期なので、今だから「ちょっと時間ちょうだいね」—って。すごく大変な時期ではないから。だから高 3 のお母さんとかには声を掛けられないし、いま大変だよ—ね、それどころじゃないよ—ね—って—いう。そういう生活の中の大変な時期があるんですね。その辺もやっぱり、一般の方には分からない難しさがあって。

ス そうか。だから今なんですね。

橋 そう、だから今だったし、やりたいや—り—たい—って—ず—っ—と—思—っ—て—は—い—た—け—ど、どう進めていいかも分からなかったの—で—。

ス 最初、喫茶 frame さんでお話をしたんですね。

橋 うん、喫茶 frame さんで、震災当時の新聞とかを展示にしている。そういうのを見ながらオーナーさんと話をしたりとか。オーナーさんはうちの家庭のことを分かってくださっているの。その頃はああでこうでーとか話をしながら、「そういう話って結構大切かもね」ってそのオーナーさんにも言ってもらってたの。それで、「やっぱり私、それやんなきゃダメですよ」って。他のお客さんもそうだそうだって（笑）

ス いいお店ですねー（笑）みんなに応援されて。

橋 今がそういうタイミングなんじゃないの？って。やりなさいとかってそういう高圧的なじゃなくて、すごく自然に押してくれたので。

ス 個人的にちょっと気になったのが、この間皆さんに病院の話も聞こうっておっしゃってましたけど、皆さん薬飲まれてるんですか？

橋 結構飲んでる人が多いっていうか、重度になればなるほど服薬してます。

ス それはどういう？

橋 うちが一番最初は睡眠障害があって、24 時間が普通の人と違うんですよ。普通の人って、25 時間を頭がリセットしてくれて、で、リズムを作るとかあるじゃないですか。そういうのができないから、息子は夜 3 時ぐらいにガバッと起きて、歌う、笑うみたいなのがものすごくうさくて、マンションでとても困ってて、一番最初それで病院にかけ始めたの。

ス 一番最初っていつだったんですか？

橋 4 歳か 5 歳ぐらいの時に、大学病院に有名な先生がいたのね。すぐお薬を出してもらって、まずお薬を飲みながら睡眠を整える。睡眠薬ではなくて、睡眠を整える。そうしないと普段の本人の情緒が落ち着かない。

ス 毎日、朝晩とか飲むんですか？

橋 その頃は朝晩飲んでたかもしれない。お薬って変わることがあるのね。病院の先生も替わるし、特に大学病院とかは先生が割と動くので、替わるのね。そうすると出す薬も変わっちゃったり。その先生が使う薬を出されるから変わったりするので、本人の体調とかにもまた合わせて調整して、これは使えないとか、じゃあまた変えましょうとかってなるんだけど。うちはたまたまずーっと合う薬で来てて、中学部ぐらいかな、病院が変わったの。大学病院のその有名な先生がいなくなって、あー他の先生じゃ意味ないわって（笑）相性もあるし、その先生の知識もあって通ってたから、他のところに変わることにした。今は精神のほうの病院なので、情緒的なことがものすごく相談できる。当然先生は違う方なので、お薬が変わって、今は夜 1 回だけ飲んでます。あとはどうしても知的障害も重いので、突然声を出すとか、突然回るとか、やっぱり社会生活の中で不適切な行動って出ちゃうんですよ。音とか光にもものすごく過敏な部分を持ってるので、何に驚いて、何に動揺してるかが親も分からない。それで、急に暴れ出すとか、急に大声を出し始めるとか、そういうことを減らすために、その情緒の波をちょっと緩くするような、落ち着く薬を飲んでる人が結構多い。そういうのって 3 ヶ月分とかもらえるから、その震災の時にいっぱいあった家はいいけど……。

ス 補充のタイミングだったら。

橋 そうそう。10 月に会った人だったかな、そのお薬がすごく不安で、あったんだけどその先どうなるか分からないから、薬をもらいに行ったの。そしたら 2 週間分しかもらえなくて。そちらのお宅は紙パンツも使ってたんだけど、赤ちゃん用じゃない紙パンツってそんなにお店にも置いてなかったりするから、当時は普通のオムツすらも買うのが大変だったけど、そういうのも大変だっただろうなと思う。その方は、遠くから紙パンツをいっぱい送ってもらった。「買えないでしょう？」って。それで助かった。やっぱり薬でも困った人がいっぱいいるだろうなと。

ス その時、身近にそういう状況を知っている人がいるのも良かったけど、物資がある遠方の地域にそういう人がいるっていうのも、結構あの時は分かれ道だったなと思って。送ってもらうことができるかできないかとか、届けてくれる人がいるかいらないか。同じ地域だとみんなが買えないから。

橋 そうだねー。

ス 普通に通院が再開できたのって、どれぐらいの時期だったんですか？

橋 いつ頃だっただろう。病院にもよる。うちとかみたいに大学病院だと、基本なかなか難しいじゃない。一番災害対応の要所になってた病院だから、本当に行きたくなかった。お薬がなくなったとしても行きづらい状況ではあった。

ス 行った時に大変だったこととかありました？

橋 でももちろん大学病院だから、「そういう普段のお薬をもらう人はここから入ってここで話をしてください」みたいなことがすぐにできてたので、そういう対応はやっぱりさすがだなんて。混乱してる中に行って「すみません、うちはそうじゃなくて普通の薬が欲しいんです、診察とか無くていいんですー」みたいなことはしなくて済むから、なるほどと。

ス そこはもう万全になってたんですね。

橋 うん、万全になってましたね。そうじゃない病院はどうだったんだろうなー。もうちょっと、例えば1回話を聞いた方にも聞いてみてもいいかもしれないと思う。

ス 薬が買えなくて困ったっていうことは、そんなに無かったんですか？

橋 それはあんまり聞かない。うちもそうだったんだけど、結構その時は、普段すごい大暴れちゃんみたいな子も大人しく（笑）

ス なんか、皆さんそういうふうにおっしゃってましたよね。

橋 そう、どっちかっていうと大人しくなる傾向が。パニックらずに。ただ本人も、何だ何だ、お母さんもすごく大変そうだなみたいなことを、もう察知して。なんて言うんだろう、こうなるよりも、こう一なってた。自分の中に……。

ス 閉じる、みたいな感じなんですかね。

橋 うーん、閉じる。それはたぶん本人の心を守るためにも、閉じる方向になってたお子さんが多いと思います。話を聞いていても。うちもそうだった。

ス それは意外でしたか？

橋 意外でした。うちもそうだったけど、ああそっちもそうなんだ、こっちもそうなんだって。

ス 一番大変だったことって、どのことでした？一番っていうのは特に無いですか。

橋 一番大変だったのは……物資的にはやっぱり水で、うちの場合は水を汲みに行けなかったから飲み水なんだけど。そうじゃない部分で言えば、もっと情報を取れるようにしておけば良かったかなって。

ス そうか。ネットワークがあればって話をされてましたもんね。

橋 そう。

ス 話を聴いた方の中で、地域みんなが知っていたから助かった、っていう方もいらっしゃいましたね。

橋 そうそう、その部分はうちはすごく弱かった。あんまり周りの人に助けて助けてを普段からしてなかったから。全盲の方とかは周りが自然に、そこのおうちはこういうことで困ってるだろうなって、分かりやすかったりするけど、うちはそうではなくて。

ス 確かに想像が及ばないですね。

橋 うん、そこまでは本当に。地震が来る来るとは思ってたけど、あんなに長く影響が出るとか、学校が長く閉校になるとは思ってたなかったねー。ネットワークづくり。ネットワークって言っても結局、広域でみんなが被災者になるから、ヘルパーさんに助けてほしくても、いやうちも被災者で、当然家庭があってとかなるから。1回目に録音させてもらった時に、動ける人達でつながって、専門知識がある無いじゃなく、本当にちょっとしたことで、例えば「水を2リットルだけお願いします」とかそういうので、「近場にいる自分はチャリで動けるから行けます」みたいな、そういうネットワークとかができないもんかなーみたいな話をさせてもらったんだけど。

ス 仙台は学生さんとか多いから。

橋 そうそう、福祉大があったりとか、学院も街なかに来たし、ね。県北のほうなら仙台大学とか体の強い（笑）体育に強い人達、動ける人達がいっぱいいたりとか。

ス そうですね。そしてたぶん、何かしたいけど何をしたらいいか分からないって思ってる人達も、その当時はたくさんいたことも後から分かってるわけだから。

橋 そう、すぐにそこまで構築できなくても、そういう助けができるかもしれないよーっていうことを言ってもいいかなと。そしたら、「こういう方法がありますよ」とかって、それこそ大学だったり学生さんとかで、もっとうまくできますよっていうアイディアが出たりするかもしれないし、やっぱり知ってもらうことなんだなーって。

ス 確かに、ただ水を運ぶだけで役に立てるとかっていうことは分からないですもんね。分からない自分は手を出しちゃいけないんじゃないかって思っちゃう……。

橋 うんうん、自分には無理なんじゃないとか。

ス でも、ただ買って来たり運んだりするだけで助けになるっていうことは、知れたほうがいいですね。

橋 本さんは、震災で大変だったことを知ってもらいたいけれど、日ごろから困ってることもかも知ってもらいたい？

橋 そう。それは、私がおもっちゃんと周りに「こういう子でこういうことをやっちゃいますけど、本人に悪気はなく（笑）」みたいなことを、もっともっと、ちっちゃい発信をたくさんしておけば良かったなーって思ってる。小1から遠くの支援学校にスクールバスで行くと、地域の小学校に通ってないから、そこで結構ストップしちゃう。

ス なるほど。お家の周りの人には知ってもらえる機会が少なくなっちゃった。

橋 いるっていうのはみんな分かってはいるけど、どう助けたいかみたいなことはたぶん誰にも分からないし、その頃私もどう助けてもらえばいいか分かってなかったな。いっぱいいっばいで（笑）

ス そっか。「何かあれば言ってくるだろう」みたいな感じでみんな思ってたんですね。

橋 うんうん。

ス 当時 LINE とかがあったら、ちょっと違ったと思います？

橋 そうだねー。そう思います。LINE があって、セキュリティーがちゃんとしてる状態であれば、もっと発信しやすかった。

ス いっぱい宛先を入れてメールを一斉送信するしかなかったですもんね。そういう連絡とかはしたことありましたか？

橋 あの時、たぶん私はメッセージとか SNS とかやってなかったと思う。インスタもやってないしフェイスブックもその頃はやってないし。

ス 当時無かったですよ、まだ。

橋 そんなじゃなかったよね。

ス フェイスブックも流行ったのは震災のあとだと思う。ツイッターだけですよね。

橋 ツイッターは今もやってなくて、1回も手付けてないのね。なんか信用してないので（笑）

ス でも当時はツイッターだけがつながりましたね。

橋 そうよね。すごく役に立った部分があったんだもんね。

ス うん、あの時はまだ穏やかな SNS だったから（笑）

橋 そうだねー。このお店がやってますとか、そういうのがツイッターに上がってたもんねー。

ス そうですね。拡散希望で、「誰々が困ってます」っていうので、近くの人が助けに行くみたいなのはありましたね。

橋 ただやっぱり、親の会とかからメールの配信とかはあったから、それは来たの。メールはつながりやすかったじゃないですか。でもやっぱり間違った情報も来るから、これを信じちゃう人いるんだろうなって思うと、やっぱり怖い部分が……。たぶん良かれと思って発信してるから。ヨウ素を飲むといいとか、原発関係で不安な人達には配りますとか、そういう情報が来て。一カ所だけじゃなくて、他からも入って来てたし。

ス うーん。確かにデマもあるし、もう少し信頼できる情報源が必要？

橋 そうだねー。たぶん今なら行政でも、仙台市とかそういうところでも、もうちょっとちゃんと LINE とかで発信できるよね。確実なことを公式に。「いろいろ情報があるかもしれないけどここを見てください」っていうことも、さすがにできるよね、仙台市でも……とって（笑）

ス でも、普段からその仙台市の情報をフォローしてないと、その時にわざわざ見に行くのかな。

橋 どうなんだろう。でもそういう時は強制的に入ってくる情報ってあるでしょ？

ス あ、エリアメールみたいなやつとか？

橋 そうそう。エリアメールって強制的に入ってきて、すごい音でビックリする。音もね、穏やかにしてほしいの（笑）

ス ビックリしちゃいますね。

ス 今までいろんな方に話を聴いてこられて、武美さんの中で、これは共通してるなとか、逆に思ったのと違ったなーとかはありますか？

橋 みんなほぼ仙台市だから、すごい備蓄してたんだなって。特に食料は、みんな備蓄をすごいしてたんだなっていうのは思った。春雨の子もすごいいっぱい（笑）しかもやっぱり知ってる人からももらったり。

ス やっぱり周りに言っておくって大事なんですね。

橋 そのお宅は本当に困ってたから、それはみんな知ってて。それしか食べれないんだ、だけど元気だよって(笑) そういうネットワーク的なことって意識してなくて、知ってもらってたから助けがあったっていうようなのは、すごく気づかされた。

ス 震災後、意識的にみんなに知ってもらおうとかはされました？

橋 民生委員さんとかと連絡を取って、そういうことがあった時に助けがいる人だ、みたいな登録はさせてもらった。あと何だろう……ずっと同じマンションに住み続けてるんだけど、すごく人の入れ替わりがあって、これはダメだっと思ってている。

ス そっか、なるほど。

橋 今って町内会の活動とかがどんどん無くなっていったでしょう？うちのマンションもだいたい前に町内会が無くなったの。で、余計にダメだ……って。

ス 面倒だと思ってる人もいますよね、町内会は。

橋 うん。高齢者が多くなってきてるから立ちゆかなくて、役員をやってくれる方がどんどんいなくなってしまうから、そうなる。だから、近所の方達のネットワーク的なことは、今は逆に難しくなってる。でも障害者の支援に関してのネットワークはその頃より強くはしている。ショートステイで泊まりに行くところとか、ヘルパーさんも2カ所、割と近場の方とかに。ショートステイとかで泊まりに行くようなところが、最近マンションのお向かいに偶然できたの(笑)びっくりするところにできて。

ス 最高だ。

橋 とてもありがたいところにできた。実は今日も泊まりに行きます。すごくありがたい。それでも、みんなやっぱり難しい人たちだから、必ず「ここでいいよ」ってなるとは限らないから、「いいよ」ってなったので本当に良かった(笑)

ス 震災当時は、ユウヤさんはまだ書をやってなかったんですか？

橋 やってなかった。

ス じゃあそのつながりは無かったんですね。

橋 無い。書かなかったし、そういう人に教わる場所にいらなかった。

ス いつからなんですか？

橋 震災の年の秋に、幸町の宮城県障害者センターで書道の体験教室があって。そこはちょこちょこ行って場所も知ってるから安心できて、私が車でちょちょっと連れて行けて、パニックったら車に乗せて連れて帰って来れる場所で。障害者センターだから、途中で「ヤダー！」とか「帰るー！」とかパニックになっちゃったってなっても、そんなに迷惑をかけないところなので、行ってみたの。本人も知ってる場所だから、普通に嫌がらずに行った。で、最初からガーってすごい書いてたから、ビックリした。でもそこで出会えたので、本人のストレス解消にすごくつながってるのね。書だから、絵筆とかじゃない毛筆の筆で、墨で。墨って香りが結構落ち着く香りだし、毛筆のシュルシュルシュルみたいな感じて、すごい気持ちいいんですよ。子どもの時はやってたけど今はやってない方とかがやると「気持ちいい」って(笑)なんかやっぱり癒やしがあるんだなって。でも思春期になっていく彼とかは、グアアって紙も破り破り(笑)ものすごい、半紙とかその下に敷いてる新聞紙とかも破り破りとか、すごいエネルギーで、パワー有り余ってるし、ストレスいっぱいなんだなーみたいなこともぶつけて、そういうことに出合えて良かった。そういう、本人のお楽しみみたいなことを震災後に探してて。すごく探さなきゃいけない、見つけなきゃいけない、私は……って。

ス それは震災があったからそう思ったってことですか？

橋 そうそう。本人がどんどん貝のように閉じこもってて、私も助けてあげられない。あなたの好きな物を、チラシも持って来てあげられないし、好きなテレビ番組も見せてあげられないし、何を差し出せばいいんだろう。何にもできないや、ごめんっていう。見つけてあげられなかったなーって。音楽はあったけど、音鳴らすわけにはいかないし。

ス そっかー、音。

橋 うん。すごく探さなきゃいけないって思ってた時に会って、無理矢理じゃなくて本人がすうっと入れたから。で、今も続いているし、たまたま指導してくれるのがすごく理解のある書家の先生で、すごい上手いし、高圧的じゃないし、先生先生してなくて、にーちゃん的な。「おーいいないいな！じゃあ次これやれー」みたいな。

ス 乗せるのが上手な感じ。

橋 うん。褒め上手、乗せ上手だし、本人もビリビリしてる感じのストレスいっぱいの時も付き合ってくれる、優しい先生だったから、ありがたい。

ス 探そうと思った時に、他のことも試したりはしたんですか？

橋 もちろん、音楽系のこととか、リトミックみたいなことも試してた、けど……。あと英会話とダンスとかも組み合わせたような、ちゃんと障害者のところとかも行ってみたけど、もうヤダ、2度と行かないって（笑）拒否られたので。やっぱり無理矢理はダメだから。合うものが見つかる、出会うのってやっぱりみんな大変って言ってます。

ス それを始められてから、その繋がりで知り合いとかが増えていったり？

橋 本人は友達を求めるタイプじゃないから欲してないので、ずっとその先生とマンツーマンでやってるんだけど、私自身はすごくつながっていく。無理のない人たちとどんどんつながれてる。そのアートを始めて、息子の個展を18歳から始めて、フェイスブックも始め、インスタも始めて、ありがたい人たちとすごくつながってってます。

ス じゃあそれはセーフティネットでもあるというか。

橋 そうだねー。そして自信を持たせてもらってるし。「これはちゃんとしたアートだよ、出しましょう」みたいな。やっぱり親って「え、こんなもの」じゃないけど（笑）これをアートと言っていいのかなっていう迷いがずっとあったから、18歳まで個展はやってなかったけど、画家の人とかイラストレーターさんとかプロの方に「出しなさい」って言ってもらえたりとか。そうか、言っていいんだっていうのがあって、出すようになった。

ス 18歳ということは、何年前？

橋 今23歳なので、5年前。震災から7、8年経った時。一番最初の個展を、うちでやりなさいって言ってくれたギャラリーカフェの方が「ちゃんと金額をつけないさ」って。例えば、うちの息子のこういうものですけど2万円です、とかって、私の中では「い、いいんだろうか」って。売れるわけないだろうとか、どういう基準で金額をつけたらいいとかもまるで分からないし、個展って言っていいのかな？みたいな気持ちもその時あった。だけどやりなさいって言ってもらって。でも支援学校に通いながらだと、お金を取っていいんだろうかとかって、ちょっとクエスチョンマークがあったから、個展をやりたいて高等部ぐらいから思い始めたけど、その18の卒業のタイミングで。

ス あー、なるほど。

橋 3月だったんだけど、卒業ですからちょっとお金関係のことの文句はやめてくださいみたいな（笑）一応そこを線引きにした。学校に在籍してるあいだは何か言われないように、卒業のタイミングで。そういうのも、やっぱり遠慮みたいなものがずーっと自分の中に、今でももちろんある。けど、今は「アートです」って言っている。

ス ここ5年でその辺は劇的に変わったんですか。橋本さんの中の感覚とかも。

橋 変わりました。うん。自信を持たせてもらって。「彼はこういう人だけどアーティストでもあります、得意分野があります、あなたはすごい人だよ」って。その部分は本人を褒め称えて、あなたはアーティストですって。お金を出して買ってくれる方が、ファンですって言ってくれる方がいるんだよってというのは時々言っていて、本人も「へへん」っていう感じで（笑）。

ス 書き始めてから、情緒的にも変わってきましたか？

橋 やっぱり書くことで、そのマグマのようなストレスのはけ口にだいぶなってるので。思春期にはちょっと私に手が出ることもあったんだけど、家庭の中だけならまだしも、それ以外の方に行ってしまうことはとても怖かったので、それだけはなんとしてでも収めたいって思っちゃうんですね、母親なら絶対。でもそうならずに済んだので。そして先生も誰でもオッケーではない。「あ、そういう状態ならちょっと休んでください」って普通なら言うと思うの。こんなに落ち着かなくてとか。普通なら「やめてください」とか「じゃあ今日は帰る？」とか言って帰らされたりすると思うけど、その先生は「そうだよなー、じゃあここで吐き出せー」みたいな感じで、紙とかがダメになっても全然いいよって。

ス うんうん。でもそれだけの凄みがあったんじゃないかっていう気がしますね（笑）

橋 うん、結構すごかった（笑）

ス 書くっていうことへの。やめろなんて言えないような（笑）

橋（笑）申し訳ない。でもそれもその先生だから出せるもので、誰にでも出すわけじゃなくて、心を許してるから出すのね。だからやっぱりそういう人と出会えたことは、すごくありがたい。ヘルパーさんでも誰でもオッケーじゃ

なくて、彼らは選ぶので（笑）やっぱり合う人との出会ってすごく大切だから、アート関係のこととかも、「いや、うちはそんなんじゃないです」とかっていうお母さん方が多いので、そこを一步踏み出してほしいなって、ずーっとそれは言ってます。

ス その先生のところに今も行っているんですか？

橋 うん、ずーっと。月に1回やってます。障害者センターで、私が場所を予約してやったり。すっごく大きい紙で、大きい筆で、書道ガールズみたいを書く時もあるんだけど、そういうのは先生のお宅で。

ス 作品を作る時は、ご自宅でもしたりするんですか？

橋 自宅ではほとんどやらない。それは息子が、ここでは頑張る、他ではしない、っていうタイプの人なので。家で私が「やれやれ、書け書け」っていうオーラを出すと嫌になっちゃうの、やめちゃうの。お願いだから続けてほしいって思ってるので、だから家では極力やらない。

ス じゃあ、月に1回作品を作ってるんですね。へー、そうなんだ。

橋 うん。でもちっちゃいものなら100枚ぐらいとか、もうガーガーって書くし。